

# かつての四季藻場の回復を目指して

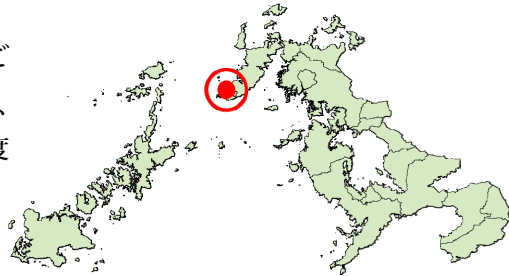
## 志々伎地区磯焼け対策活動組織

### 志々伎地区について

志々伎地区は、長崎県本土の北西部に位置する平戸島南部にあり、志々伎湾に面す。

地区の基幹産業は、漁業と農業である。半農半漁で暮らす人が多いのが特徴である。

漁業は、刺網、一本釣、ごち網、採貝藻などが営まれ、その水揚金額は平成 30 年度で年間 15 億円に及ぶ。

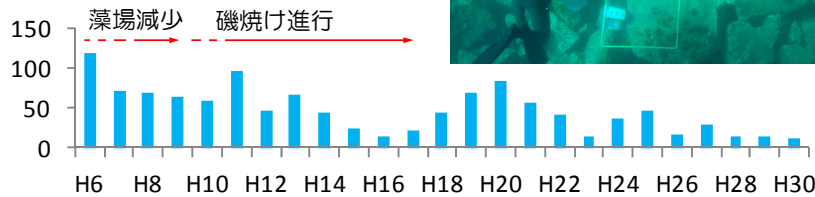


### 藻場の現状

地区が面す志々伎湾には、平成のはじめまでは大型海藻のアラメ・カジメ類やホンダワラ類などで構成された藻場が 34ha 広がっていた（第 4 回自然環境保全基礎調査、環境省（1994 年））。しかし、平成 5 年頃から藻場が減少し、平成 10 年代には磯焼け状態となった。

また、その影響によるものかアワビ・サザエ・ウニを主に漁獲する採貝藻漁業の水揚量が 119 トン（平成 6 年）から、現在は 20 トンを切るまで減少している。さらに、ヒジキやテングサに代わっては直近 10 年間水揚がない状態が続き、藻場の回復が地区の沿岸漁業の大きな課題となっている。

採貝藻生産量（t）



### 組織の設立及び活動方針

上記の課題から、潜水漁を行う漁業者が主体となって、平成 21 年度に「志々伎地区磯焼け対策活動組織」を設立した。

組織の活動目標は、かつて周年にわたって大型海藻がみられた四季藻場の回復である。その達成のため、現在、以下の方針で活動を展開している。

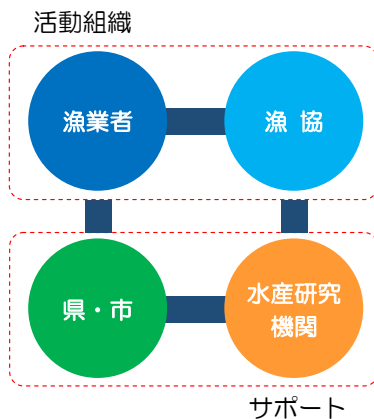
#### ●活動方針

##### ① 藻場の回復を阻害する ウニ除去の徹底

- 活動区域を絞り、構成員全員参加の下、集中的にウニを除去する。
- 藻場が維持される適正なウニ生息密度の目安 5 個以下/m<sup>2</sup> を目標に活動を行う。
- 除去したウニは、陸揚し、田畑の肥料などに有効利用する。

##### ② 活動の効果を検証し、次の計画に活かすための モニタリングの定量化

- 定点を設定し、定期的に海藻の被度とウニ生息密度を観察・記録し、その結果を保存する。
- 構成員全員参加の下、定例会を毎年 1 回開催し、結果の報告と次年度の計画について協議し、情報を共有する。また、判らないことは専門家に相談する。



### 四季藻場の回復を目指して

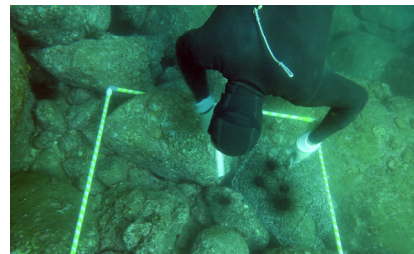
#### (1) ウニの除去

藻場の回復を阻害するウニ（主にガンガゼ）を除去し、自然に着生するアラメ・カジメ類などの大型海藻の生長・生残を促す。

活動当初は、場当たりに的除去活動を進めており、効果が十分に発揮されなかった。そこで、現在は活動場所を絞り、その中でウニを集中的に除去している。

除去の方法は、素潜りによって手かぎでウニを採取し、陸揚げする。陸揚げしたウニは、持ち帰り、構成員が所有する田畑に肥料としてまく。

作業は、初夏に 2 回、秋季に 1 回実施。各回、構成員 77 名全員参加のもと、一斉に行う。

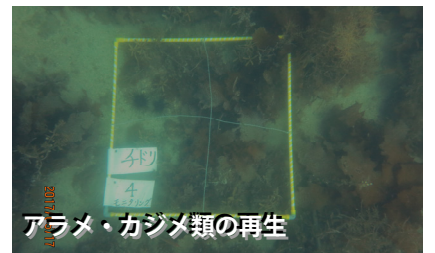


#### (2) モニタリング

活動当初の場当たりの取り組みの反省から、現在は、活動の経過を定期的にモニタリングし、効果の検証を行いながら活動を展開している。

モニタリングの方法は、活動区域の 2 箇所に各々 5 地点の定点を設け、そこに 1m×1m の方形枠をおき、海藻の被度とウニの生息密度を観察・記録する。調査は藻場の繁茂期を含む 5～10 月に 7～8 回行う。

調査結果は、その日のうちに票に整理し、後日内容をとりまとめ、構成員全員を集めた定例会で報告・協議し、次年度の計画につなげる。



### 活動の効果と課題

2 箇所の活動区域のうちの『千鳥』の海藻平均被度は、ウニ（ガンガゼ）密度の低下に伴って 8% から 35% まで増加している。また、平成 28 年度冬季にアラメ・カジメ類が確認されるようになり、30 年度には本種が優占種となった。現在、この周辺では漁獲対象のアカウニの身入りが良くなっており、構成員の藻場再生に対する意欲が増している。

一方、『長手』は、藻場の回復がみられない。この区域は、水深が深く、且つウニが隠れやすい大石が多いことから、ウニの除去効率が千鳥に比べ悪い。また、浮泥の堆積が最近目立ってきており、今後、場所の変更を含めた計画の見直しを考えたい。

